

親の職業と青年期の子どもの親子関係との関連¹⁾

筑波大学人間系 佐藤 有耕

Parental occupation and the parent-child relationship during adolescence

Yuhkoh Satoh (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study investigates differences in the psychological experiences of adolescents due to parental occupation. A questionnaire was designed to ask adolescents about their parents' occupations, the influences of parental occupations on them, evaluations of parental occupations, and positive affects for parents. Junior-high school, high school, and undergraduate students ($N=1,896$; 1,000 male, 896 female) responded to the questionnaire. The results indicate that parental occupation is one factor that influences the parent-child relationship during adolescence. More specifically, there are differences in the psychological experiences of adolescents due to parental occupation, such as praise for their occupations. Furthermore, adolescents whose parents have occupations that make greater social contributions have distinct characteristics, such as more positive evaluations of their parent's occupations.

Key words: parent-child relationship, occupation, adolescence

青少年の人格形成・進路形成には親子関係をはじめとして、さまざまな要因が影響することが想定されるが、親の職業が何であるかも影響をもつことが予想される。それは、われわれの日常生活においては、特定の職業人の子ともだというだけで、望ましい人格や行動を期待されたり、能力の高さや優秀な学業成績を期待されたりすることが起こり得るからである。さらには、社会的意義が高いとされる仕事に親が就いている場合には、親と同じ進路を選び親と同じ職業選択をすることがあたかも当然のように期待されることもある。たとえば、“校長の娘であるから礼儀正しいよい子であるはずだ”、“院長の息子だから頭が良く将来は医学部に進むだろう”などのようにである。実際、職業継承の高さについては、医師（真野・小林・伊田・山内・藤沢・塚原，2004；森・松浦，2007）、看護師（北原・佐々木・

岡部，2005）、小中教師と大学教師と建築設計士（田中・小川，1985）などの報告がある。

特定の職業に関していえば、周囲のまなざし、親の期待、そこから生じる自己意識が青年期の子どもの人格形成・進路形成に何らかの影響を与えることは考えられる。また、それ以前に、親に対する意識や感情に影響を及ぼすことが考えられる（たとえば、船曳1998参照）。

親の職業は、子どもにとっては所与の環境であり、子ども自身は与えられたその環境を受け入れていくしかないものである。そして周囲から見れば、他人の親の特徴として職業は記号化しやすく、わかった気になりやすい便利な指標である。人が人を見ると、親の職業が何であるかは、有用な情報の1つとなっている。

本研究では、親の職業という所与の環境によって、青年期にある子どもたちがどのような心理的経験をしているのか、心理的経験の程度の違いが親子関係に関連するのか、そして親の職種の違いによって心理的な経験に差異が生じているのかを明らかにすることを目的とした。

1) 本稿は、日本教育心理学会第56回総会（2014）において発表した内容に加筆したものであり、行われた研究はJSPS 科研費（萌芽研究）24653175の助成を受けたものです。

方 法

質問紙の構成 質問項目は性別、所属と学年、年齢のほかに、1) 親の職業に関する項目(計3項目、主として記述式)、2) 親の職業を継ぐことに関する社会の価値観の項目(計8項目)、3) 親の職業から受ける影響の項目(計24項目)、4) 親の職業に対する評価(計12項目)、5) 親に対する肯定的感情(計6項目)、6) 就業意識および人格形成の指標の項目(計18項目: アイデンティティの形成の程度を表す項目として、三好・大野・内島・若原・大野(2003)によるS-ESDSの「identity達成 vs identity拡散」の尺度7項目から抜粋した5項目、およびセルフエスティームの高さを表す項目として、山本・松井・山成(1982)から抜粋した4項目を含む)であった。中学生・高校生も対象とすることから項目数は少なめにし、既存の尺度2つの使用においても項目を抜粋して用いた。評価項目はすべて5件法を用い、2) 親の職業を継ぐことに関する社会の価値観の項目では、「ほとんどの人がそう考えていない(1)」「半分以上の人はそう考えていない(2)」「どちらともいえない(3)」「半分以上の人はそう考えている(4)」「ほとんどの人がそう考えている(5)」を、それ以外の項目では、「いいえ(1)」「どちらかというといいえ(2)」「どちらともいえない(3)」「どちらかというとはい(4)」「はい(5)」という選択肢を用い、カッコ内の得点を付与した。

調査の実施手続き 質問紙は一部ずつ封筒に入れて配布し、回答後は封をして提出するよう求めた。表紙には、アンケートへの協力依頼のほかに、研究への協力は任意であること、回答することによって調査への協力に同意したものとみなすことを明記し、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て行っていることを記載した。

調査対象者と調査時期 短期大学1校を含む大学8校から859名(男子436、女子423)、中等教育学校を含む高校3校から558名(男子306、女子252)、同じく中等教育学校を含む中学3校から479名(男子258、女子221)。総計は1896名(男子1000、女子896)となり、平均年齢は17.24($SD=2.61$)歳であった。調査時期は2014年1月-2月であった。

結 果

1. 各変数からの得点の算出

質問項目の大部分は本研究のために独自に作成されたものであり、方法に示した2) 社会の価値観、

3) 親の職業から受ける影響、4) 親の職業に対する評価、5) 親に対する肯定的感情、6) 就業意識と人格形成の項目ごとに、中学生から大学生までの全データを用いて因子分析を行った(重みなし最小二乗法、promax回転)。固有値1のときの因子数を最大の因子数と仮定し、順次因子数を1ずつ減らして因子数が1となる場合までの因子分析結果を比較した。そして解釈可能性から最終的な因子数を決定した。因子名、因子負荷量などの因子分析結果および各項目の平均値(SD)はTable 1からTable 5に示した。

因子負荷量が.40以上を示した項目の得点を合計し、項目数で除したものをその因子を表す得点として分析に使用した。方法に記載した2) - 6)の項目ごとに因子分析を行って得られた計16得点の平均値(SD)はTable 6の通りであった。既存の尺度を抜粋して使用したアイデンティティの5項目とセルフエスティームの4項目は、どちらも設定通りにそれぞれ1つの因子に高い負荷量を示し、設定通りに得点化された。なお項目数2項目で得点化した場合は、 α 係数が.50台と低い場合があった。

Table 6に示した調査対象者全体の結果で得点が1点台と低かったものは、親の職業を加味して評価される経験、親の職業を継ぐことの要請、親の職業に対する忌避感情、親との同職就業意向であった。これらのことが示すのは、親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりすること、親や周囲から親の仕事を継承するよう要請されたり期待を向けられたりすること、親が今の職業とは違う仕事に就いてくれていた方が良かったと思うこと、親の職業と同じような仕事に就こうと考えるようになること、これらのことは中学生から大学生の年齢層において経験されることは、全体としてみれば少ないということである。得点が3.5を越えていたものを高い得点と見なすと、得点が高かったものは親の職業に対する肯定的評価、親に対する肯定的感情、職に就くことへの意識の高さであった。項目内容から見ると、親の職業に対する肯定的評価には、経済的側面、社会的貢献・社会的価値、仕事に対する親の態度に対する評価が含まれていた。現代の青年に関しては、一般に家庭生活に対する満足度が高く、親子関係も良好であることが指摘されている(内閣府政策統括官, 2009; NHK放送文化研究所, 2013)が、今回の分析結果もそれを支持するものとなった。

2. 親に対する見方と子の就業意識に関連する要因

今回の分析で抽出した16得点間の相関から親に対する見方と子の就業意識に関連する要因を検討するために、中学生から大学生までの全データを分析対象とし、重回帰分析（ステップワイズ法）の繰り返しによるパス解析を行った（Figure 1.）。5水準の設定は、全体的な背景要因として親の職業を子が継ぐことに対する社会の価値観の認知を置き（第1水準）、それは子が親の職業から受ける影響（第2水準）にも関連するものとした。次に、子が親の職業から受ける影響は、親の職業に対する子の評価（第3水準）に関連し、それは親に対する感情（第4水準）にも関連し、最終的に子の就業意識と人格形成（第5水準）にも何らかの役割を果たすであろうという想定に基づいて行った。ここでは主要な結果として、第3水準、第4水準、第5水準で、決定係数 R^2 が.15を越えた4つの目的変数の分析結果について述べる。

(a) 親の職業への肯定的評価と忌避感情 第3水準の親の職業への肯定的評価および親の職業への忌避感情をそれぞれ目的変数とした分析結果は、順に決定係数 $R^2=.20$ ($F(4,1781)=109.99, p<.001$), $R^2=.15$ ($F(5,1789)=62.43, p<.001$) で有意であった。間接的なパスも含めて結果をまとめると以下の通りである。

親の職業を良い職業だと子が認識することには、①親の職業をほめられる経験 ($\beta=.42, t(1781)=16.62, p<.001$) が関連していた。なお、親の職業をほめられる経験が低いと親の職業への忌避感情が高まることも示されており、親の職業をまわりからほめられることは、子どもにとってポジティブな経験になっていることが示唆された。

また、親の職業に対する忌避的な感情には、①親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験 ($\beta=.25, t(1789)=8.60, p<.001$)、②まわりの人よりも高い水準の成果を出すことや優秀であることを課せられていること ($\beta=.19, t(1789)=8.42, p<.001$)、③親や周囲から継承の要請や期待を向けられること ($\beta=.11, t(1789)=4.16, p<.001$)、④親の職業をほめられる経験の少ないこと ($\beta=-.24, t(1789)=-9.54, p<.001$)、が関連していた。結果をまとめると、以下の通りである。

(i) この結果が示唆しているのは、優秀であることが自分に課せられるのは“親の職業のせい”、だと子どもが感じているということであろう。それがために、優秀であることの要請が親の職業への忌避感情につながるのだと考えられる。(ii) 親もしくは周囲から、親の仕事を継ぐことや親と同じ仕事に就くことを要請されることも、親の職業への忌避感情を強めていた。(iii) 親の職業を加味して自分

Table 1
親の職業を継ぐことに関する社会の価値観認知8項目の因子分析結果
(重みなし最小二乗法, promax 回転後)

	F1	F2	h^2	平均値	SD
F1：家業や職業を子が継ぐことに賛同する価値観の認知 5項目 $\alpha=.65$					
偉大なスポーツ選手の子どもは、恵まれた素質を持っているのだから、親と同じスポーツ選手になって活躍してもらいたい	.57	.01	.33	2.84	(1.06)
先祖代々医者をしている家の子どもは、やはり医者になるのがよいだろう	.55	.08	.32	2.94	(1.05)
その家の家業や親の職業を、子どもが継いでいくのは大事なことだ	.51	-.04	.26	3.11	(0.95)
親が先生をしている家の子どもは、将来良い先生になれるだろう	.50	.01	.25	2.37	(0.98)
子どもがその家の家業や親の仕事を受け継ぐのは立派なことだ	.48	-.03	.23	3.62	(0.98)
F2：家業や職業を子が継ぐことの困難さを指摘する価値観の認知 2項目 $\alpha=.57$					
偉大な親の子どもは、親の後を継いでうまくいかないことが多い	-.04	.80	.64	3.06	(0.95)
子どもが親と同じ職業を目指す、子どもはかえって苦勞する	-.01	.49	.24	3.13	(1.04)
政治家や大企業の社長の家に生まれた子どもが、親の後を継いで政治家や社長になるのはずるい	.17	.25	.10	3.09	(1.14)

$N=1861$, 全体の寄与率：29.50%, 因子間相関 = -.14

各項目得点の平均値及び標準偏差を表の右側に示した。

斜体字で表記した項目は因子負荷量が.40未満であり、得点化の際には除外した。

因子負荷量を太字で示した項目で得点化した場合の α 係数、因子名も表中に記した。

Table 2
親の職業から受ける影響24項目の因子分析結果（重みなし最小二乗法, promax 回転後）

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2	平均値	SD
F1：親の職業を加味して評価される経験 6項目 $\alpha=.83$									
自分が努力して良い結果を出しても、親が〇〇という仕事の人だからだね、と思われてしまうことがある	.88	-.12	-.09	.04	.02	-.11	.56	1.30	(0.80)
親が〇〇という仕事だから、勉強ができるんだね、と言われたことがある	.77	-.14	.15	.01	-.04	-.10	.53	1.65	(1.22)
親の職業のことで、あの子は〇〇という仕事をしている家の子ともだ、という目で見られることがある	.74	-.03	.01	-.01	-.01	.04	.56	1.51	(1.09)
親と同じ職業に就くのでしょうかね、と人から言われたことがある	.54	.22	.00	-.03	-.02	.15	.59	1.54	(1.14)
親が〇〇という仕事をしているわりには、あなたはそれほどでもないね、と言われたことがある	.53	.08	-.02	.07	.05	-.14	.31	1.30	(0.78)
親の職業を継ぐのか、と人から聞かれたことがある	.42	.20	.05	-.07	.03	.26	.55	1.75	(1.36)
F2：親の職業を継ぐことの要請 4項目 $\alpha=.82$									
親から、親の仕事を継いでほしいと言われたことがある	-.07	.90	-.03	.01	-.04	-.02	.69	1.29	(0.80)
親から、親と同じ仕事に就いてみないかと勧められたことがある	-.07	.82	.06	.02	-.01	-.08	.60	1.57	(1.11)
うちの親は、子どもが親と同じ仕事に就くことを期待している	-.03	.75	.03	.04	.04	-.06	.55	1.57	(0.98)
親の職業を継いでほしい、とまわりの人から言われたことがある	.34	.47	-.06	-.06	-.02	.08	.52	1.34	(0.86)
F3：親の職業をほめられる経験 3項目 $\alpha=.91$									
親の職業のことを話して、「良いね」と言われたことがある	-.03	.00	.98	-.02	.03	-.02	.91	2.71	(1.51)
親の職業のことで、「すごいね」と言われたことがある	.00	-.02	.83	.04	-.03	.03	.70	2.76	(1.56)
親の職業に対して、「うらやましい」と言われたことがある	.07	.06	.80	.00	.02	-.02	.72	2.34	(1.42)
F4：優秀であるようにとの要請 4項目 $\alpha=.83$									
まわりの人と同じレベルで満足してはいけなくと強く言われた	.02	-.03	.00	.81	-.01	.05	.64	2.74	(1.46)
人に後れを取ったり人に負けたりしてはいけなくと教えられた	-.06	.07	.00	.74	.04	.00	.59	2.41	(1.29)
人より優秀であることを当然のこととして求められた	.14	-.01	-.01	.69	-.05	-.04	.49	2.21	(1.28)
人並みではなく、人並み以上の努力をするように親から求められた	-.05	.02	.02	.65	.08	.04	.50	2.96	(1.39)
F5：問題を起こさないようにとの要請 4項目 $\alpha=.79$									
校則違反をしないようにと強く言われた	.00	.01	.01	-.10	.85	-.03	.63	2.72	(1.35)
学校で問題を起こしてはいけなくと強く言われた	.04	.02	-.08	.08	.71	-.05	.59	2.84	(1.42)
まわりから後ろ指を指されるようなことはするなと強くしつけられた	.03	.00	-.02	.09	.68	.01	.55	2.64	(1.33)
まわりの大人にきちんとあいさつするよう厳しくしつけられた	-.06	-.07	.11	.02	.50	.11	.28	3.56	(1.28)
F6：親の職業が身近であること 3項目 $\alpha=.74$									
親が仕事をしている姿はふだんからよく見ている	-.01	-.03	-.04	.07	-.04	.82	.62	2.11	(1.44)
親の職場によく行った	-.03	-.02	.04	-.03	.06	.77	.60	2.35	(1.52)
親がふだん職場でどんなことをしているのかよく知らない	.11	.07	.01	-.01	.00	-.62	.31	2.86	(1.50)
因子間相関行列									
	F2	.63							
	F3	.50	.38						
	F4	.21	.19	.14					
	F5	.20	.18	.10	.62				
	F6	.46	.40	.44	.06	.08			

$N=1843$. 全体の寄与率: 56.56%

各項目得点の平均値及び標準偏差を表の右側に示した。

因子負荷量を太字で示した項目で得点化した場合の α 係数、因子名も表中に記した。

が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験は、親と同じ職に就くことへのプレッシャーにもなるのか、親が違う職業であったら良かったのという思いにも関連することが示された。

(b) 親に対する肯定的感情 第4水準の親に対する肯定的感情を目的変数とした分析結果は、決定係数 $R^2=.28$ で有意であった ($F(7,1766)=97.20$, $p<.001$)。

親に対する肯定的感情には、①親の職業に対する忌避的な感情の低さが関連 ($\beta = -.33$, $t(1766) = -14.97$, $p<.001$) しているほかに、②まわりの人よりも高い水準の成果を出すことや優秀であることを課せられていないこと ($\beta = -.16$, $t(1766) = -6.50$, $p<.001$)、③親の職業を良い職業だと子が認識していること ($\beta = .20$, $t(1766) = 8.51$, $p<.001$)、④親の仕事をしている姿を日頃から見ていたり、親の職場に行ったりしたことがあり親の職

Table 3
親の職業に対する評価12項目の因子分析結果（重みなし最小二乗法、promax 回転後）

	F1	F2	h^2	平均値	SD
F1：親の職業に対する肯定的評価 8項目 $\alpha=.87$					
経済的に見ても安心できる良い職業だと思う	.81	.14	.60	3.58	(1.15)
安定した収入が得られる良い職業だと思う	.80	.14	.58	3.77	(1.14)
十分暮らしていけるだけのお金が得られる良い職業だと思う	.76	.05	.56	3.89	(1.07)
人から尊敬される良い職業だと思う	.74	.02	.53	3.49	(1.05)
人の役に立つような良い職業だと思う	.71	-.05	.53	4.15	(0.91)
社会的に必要とされている良い職業だと思う	.66	-.08	.48	4.21	(0.91)
親は自分の仕事に誇りを持っていて幸せそう	.54	-.12	.35	3.40	(1.15)
親は自分の好きなことを仕事にしている楽しそう	.44	-.07	.22	3.14	(1.22)
親は仕事が大変そうなのにがんばっていてえらいと思う	.26	-.24	.17	4.28	(0.96)
F2：親の職業に対する忌避感情 3項目 $\alpha=.74$					
もっと違う仕事をしている親の子に生まれたかった	-.04	.86	.77	1.91	(1.16)
親が今の職業とは違う仕事をしてくれていた方が良かった	-.10	.83	.76	1.85	(1.14)
親の職業のことを自分はプレッシャーに感じている	.18	.42	.16	1.48	(0.97)

$N=1839$ 、全体の寄与率：47.55%、因子間相関 = $-.36$

各項目得点の平均値及び標準偏差を表の右側に示した。

斜体字で表記した項目は因子負荷量が .40未満であり、得点化の際には除外した。

因子負荷量を太字で示した項目で得点化した場合の α 係数、因子名も表中に記した。

Table 4
親に対する肯定的感情6項目の因子分析結果（重みなし最小二乗法）

	F1	h^2	平均値	SD
F1：親に対する肯定的感情 6項目 $\alpha=.91$				
親のことが好きだ	.92	.85	4.02	(1.07)
親といると楽しい	.87	.76	3.79	(1.14)
親とは仲が良い	.84	.70	4.02	(1.06)
親を尊敬している	.80	.64	4.00	(1.11)
親のようになりたい	.75	.56	3.44	(1.28)
親には感謝している	.58	.34	4.64	(0.69)
因子寄与（二乗和）	3.85			
（%）	64.16			

$N=1872$

各項目得点の平均値及び標準偏差を表の右側に示した。

因子負荷量を太字で示した項目で得点化した場合の α 係数、因子名も表中に記した。

業が身近であること ($\beta = .15$, $t(1766) = 7.04$, $p < .001$)、⑤子が家業や親の職業を継ぐことを社会は肯定していると思なしていること ($\beta = .11$, $t(1766) = 5.45$, $p < .001$)、が関連していた。間接的なパスも含めて結果をまとめると以下の通りである。

(i) 親の職業に対する肯定と否定どちらの気持ちも親に対する肯定的感情に関連することから、子の親に対する肯定的な感情の形成には、親の職業を

子がどうとらえているかということも関与していることが示された。子が親の職業を通して周囲から見られることがあるように、親もまたわが子から職業を通して見られているということになる。(ii) また、職業人としての親を身近に見ていることが、親に対する肯定的な感情の高さと関連することも示された。(iii) さらに、世の中には、子が親の後を継ごうとしても実際には難しいとみる向きが多いと思なしているほど、親から出される優秀さの要請を強

Table 5
就業意識および人格形成の指標18項目の因子分析結果 (重みなし最小二乗法, promax 回転後)

	F1	F2	F3	F4	F5	h^2	平均値	SD
F1: 親との同職就業意向 3項目 $\alpha = .93$								
将来、親と同じような仕事に就きたいと思っている	.97	.01	.01	-.02	.03	.95	1.87	(1.19)
将来、親と同じような仕事に就くことを考えている	.94	.01	.00	-.03	.01	.88	1.85	(1.18)
最終的には、親と同じような職業に就くのが良いと思っている	.81	-.01	.00	.04	-.04	.66	1.88	(1.14)
F2: アイデンティティ 5項目 $\alpha = .70$								
私って本当はどんな人間なのかわからない	-.01	.66	-.04	-.02	.01	.46	3.45	(1.35)
私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う	-.01	.62	.13	-.09	-.09	.31	2.93	(1.26)
私は、のけ者にされているように感じる	.04	.53	-.15	-.07	-.07	.37	2.38	(1.16)
私のことを人がどう思っているか、よくわからない	-.02	.51	-.05	-.02	.10	.28	3.59	(1.20)
人生に望むものが定まらない	.05	.44	.04	.28	.05	.34	3.13	(1.34)
将来の職業についてまわりからいろいろ言われて苦痛だ	-.01	.30	.04	.20	-.08	.19	2.37	(1.37)
F3: セルフエスティーム 4項目 $\alpha = .69$								
少なくとも人並みには、価値のある人間である	-.03	.00	.75	-.01	.03	.56	3.25	(1.10)
物事を人並みには、うまくやれる	-.01	.17	.63	-.06	.10	.36	3.35	(1.11)
だいたいにおいて、自分に満足している	.05	-.21	.47	.03	-.09	.35	2.83	(1.23)
自分に対して肯定的である	.03	-.19	.45	.00	-.04	.32	2.96	(1.16)
F4: 職業を考えることへの積極性 2項目 $\alpha = .70$								
将来の職業をどうするかについては考えたくない	-.02	.07	.06	.84	-.02	.73	2.36	(1.29)
将来の職業についていろいろ考えるのが好きだ	.00	.12	.11	-.67	-.02	.43	3.09	(1.34)
F5: 職に就くことへの意識の高さ 2項目 $\alpha = .51$								
将来、きちんとした仕事につくことが大きな目標である	.03	.02	.03	.04	.64	.40	4.33	(0.97)
学校や大学を出たあと、仕事に就かない人生もいいと思う	-.01	.13	.06	.00	-.52	.29	1.79	(1.17)
将来、自分で働いて自立するつもりである	-.05	.06	.12	-.06	.36	.17	4.69	(0.68)
因子間相関行列								
	F2	.04						
	F3	.04	-.47					
	F4	.05	.37	-.23				
	F5	-.04	-.06	.03	-.35			

$N = 1820$, 全体の寄与率: 44.65%

各項目得点の平均値及び標準偏差を表の右側に示した。

斜体字で表記した項目は因子負荷量が.40未満であり、得点化の際には除外した。

因子負荷量を太字で示した項目で得点化した場合の α 係数、因子名も表中に記した。

く認識して親の職業を疎ましく感じ、結果として親に対する肯定的感情が低下するというプロセスが示唆された。もう一方の社会的価値観の認知、親の職業を子が受け継ぐことは良いことだとする社会の風潮を高く見積もっていることは、親に対する肯定的感情に正の関連を示した。

(c) 親との同職就業意向 第5水準の親との同職就業意向を目的変数とした分析結果は、決定係数 $R^2 = .22$ で有意であった ($F(5,1761) = 101.55$, $p < .001$)。子が親と同じ職業に就こうと考えるようになることには、①親や周囲から継承の要請や期待を向けられること ($\beta = .30$, $t(1761) = 11.48$, $p < .001$) が関連しているほかに、②親の職業を良い職業だと子が認識していること ($\beta = .14$, $t(1761) = 5.94$, $p < .001$)、③親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験 ($\beta = .12$, $t(1761) = 4.52$, $p < .001$)、④親に対する肯定的感情 ($\beta = .11$,

$t(1761) = 4.99$, $p < .001$) が関連していた。

子が親と同じような職業に就こうと考えるようになることには、間接的なパスも含めて以下の関連が要因としてあげられる。

(i) まず、子が親の職業を良い職業だと見なしていれば、子が親と同じような職業に就こうとする気持ちは強まる。そして親の職業を良い職業だと評価するのには、親の職業をほめられる経験が大きく関与する。(ii) また、親の職業を子が受け継ぐことは良いことだとする社会の風潮を高く見積もっているほど、親や周囲からの要請、勧め、期待も肯定的に受けとめ、その結果として子どもは親の職業と同じような職業に就こうとする意向が強くなるプロセスが示唆された。しかし、逆に親や周囲からの要請、勧め、期待を感じ取れば取るほど、親の職業を疎ましく感じてしまい、親に対する親密な感情が低下して親と同じ職に就こうとする気持ちが低下するプロセスがあることも示唆された。(iii) 先の分析

Table 6
分析に使用した変数一覧の平均値 (SD)

	平均値	SD
親の職業を継ぐことに関する社会の価値観認知の項目		
F1家業や職業を子が継ぐことに賛同する価値観の認知	2.98	(0.65)
F2家業や職業を子が継ぐことの困難さを指摘する価値観の認知	3.09	(0.83)
親の職業から受ける影響の項目		
F1親の職業を加味して評価される経験	1.51	(0.80)
F2親の職業を継ぐことの要請	1.44	(0.77)
F3親の職業をほめられる経験	2.60	(1.38)
F4優秀であるようにとの要請	2.58	(1.10)
F5問題を起こさないようにとの要請	2.94	(1.05)
F6親の職業が身近であること	2.53	(1.20)
親の職業に対する評価		
F1親の職業に対する肯定的評価	3.70	(0.78)
F2親の職業に対する忌避感情	1.75	(0.88)
親に対する肯定的感情		
F1親に対する肯定的感情	3.99	(0.89)
就業意識および人格形成の指標の項目		
F1親との同職就業意向	1.88	(1.11)
F2アイデンティティ	2.90	(0.85)
F3セルフエスティーム	3.09	(0.83)
F4職業を考えることへの積極性	3.37	(1.16)
F5職に就くことへの意識の高さ	4.28	(0.88)

N=1855-1887, 得点範囲はすべて1-5である。

では、親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験が親の職業への忌避感情を高め、結果として親に対する肯定的感情を低める結果について言及したが、親に対する肯定的感情が低まると、親と同じような職業に就こうとする気持ちが低まるプロセスも示唆される。一方で、そのような親の職業を加味して評価される経験が親と同じような職業に就こうとする気持ちを直接高めることも示された。

3. 親の職業の記述の集計と職種間での得点比較

分析の最後に、親の職種の違いによる心理的経験の差異についての検討を行った。質問項目1)の親の職業に関する項目では、まず「親（もしくは親代わりの人）」のうち、仕事をしてあなたの家の家計（暮らしにかかるお金）を支えている人を一人選ぶように指示し、選んだ親の職業名の記入を求めた。必要な場合には簡単な説明を記入できる欄も設けた。二人以上いて決められない場合は、自分と同性の親（女性なら母親、男性なら父親）を選ぶように指示した。選択肢は、父親、母親、それ以外の3種類であった。1896名のうちで、職業名に関する情報が得られたのは1747名、92.1%であった。

職業名に関する今回の集計手続きは以下の通りであった。(1) 職業名が同一であったものを、デー

タファイルの中でソートして集計し、同一職業名の人数のリストを作成した。1747名のうち、10名以上の度数のあった職業名上位22職種を選択した。(2) 22職種のうちで同一内容と見て支障がないと判断したものを同一職業名としてまとめた。「会社員」と「サラリーマン」、「公務員」と「地方公務員」と「国家公務員」、「教師」と「教員」、「医者」と「医師」である。そのうえで再集計した結果、30名以上の度数を示したものが7職種あった。(3) この7職種について、分類先の職種が明白と考えられる場合を付け加えた。外科医、開業医などの具体的個別的な記述は「医者」に含めるといった手続きである。その結果、親の職業の7職種の人数は、最終的に以下の通りになった。カッコ内には、父親が選ばれた比率、母親が選ばれた比率、それ以外の人を選ばれた比率を順に記載してある。「会社員」357人（父親：96.40%，母親：3.60%，それ以外：0.00%）、「教員」126人（65.10%，32.50%，2.40%）、「公務員」123人（87.80%，12.20%，0.00%）、「医者」58人（84.50%，15.50%，0.00%）、「銀行員」50人（86.00%，14.00%，0.00%）、「自営業」49人（93.90%，4.10%，2.00%）、「看護師」37人（0.00%，100.00%，0.00%；未記入者1名を除いたため実際には36名の比率）。7職種に分類された人数の合計は800名であり、職業名に関する情報が得られた1747名の45.8%にあたる。

続いて、親の職業の7職種間で、全16得点の一要

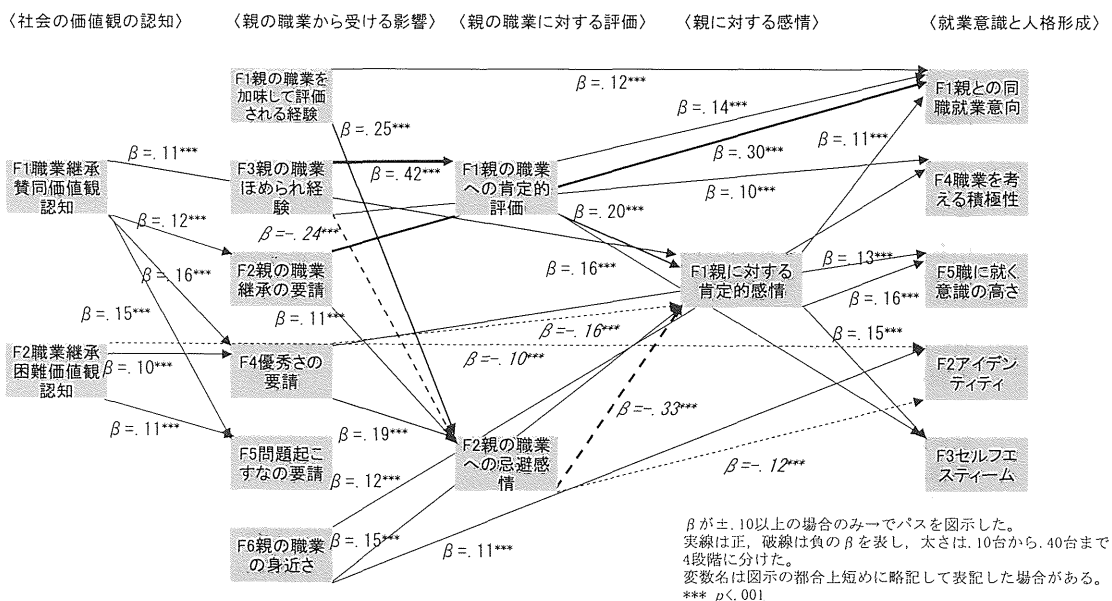


Figure 1. 全16得点を用いた親に対する見方と子どもの就業意識に関するパス解析結果

因分散分析と多重比較（5%水準, Tukey 法）を行った。親の職業の7職種間全体で有意差が見られたものは9得点、多重比較の結果特定の2職種間での有意差が見られたものは8得点あった。以下、多重比較の結果（Table 7）を中心に7職種間の差異について述べる。

親の職業を継ぐことに関する社会の価値観認知の項目から得られた2得点では、家業や職業を子が継ぐことに賛同する価値観の認知の得点にのみ有意差があった（ $F(6,783)=2.18, p=.043$, 偏イータ²乗0.02）。親が「医者」の場合に得点は3点台で最高点を示し、「教員」と「公務員」に比べて有意な差

Table 7
親の職業の7職種間での各得点の平均値（SD）と多重比較のまとめ

会社員 (n=357)	教員 (n=126)	公務員 (n=123)	医者 (n=58)	銀行員 (n=50)	自営業 (n=49)	看護師 (n=37)	多重比較の結果
家業や職業を子が継ぐことに賛同する価値観の認知							医>教=公
2.99 (0.60)	2.90 (0.61)	2.88 (0.65)	3.21 (0.65)	2.99 (0.70)	2.97 (0.57)	3.07 (0.75)	
家業や職業を子が継ぐことの困難さを指摘する価値観の認知							
3.10 (0.85)	3.07 (0.86)	2.99 (0.79)	2.94 (0.89)	3.09 (0.95)	3.13 (0.76)	3.03 (0.70)	
親の職業を加味して評価される経験							医>教>自=看=公=銀=会
1.19 (0.45)	2.67 (0.92)	1.39 (0.64)	3.09 (0.91)	1.32 (0.58)	1.69 (0.84)	1.66 (0.77)	医>教>自=看>会 公=銀=会
親の職業を継ぐことの要請							医>看=教=自=公>会
1.20 (0.46)	1.65 (0.78)	1.44 (0.65)	2.80 (1.44)	1.40 (0.61)	1.59 (0.86)	1.79 (0.88)	銀=会
親の職業をほめられる経験							医>教>自=公>会
2.08 (1.22)	3.56 (1.24)	2.80 (1.28)	4.39 (0.98)	3.01 (1.34)	2.93 (1.26)	3.31 (1.28)	医>教=看=銀>会
優秀であるようにとの要請							医>教=会=公
2.52 (1.09)	2.56 (1.09)	2.45 (1.05)	3.12 (1.16)	2.75 (1.14)	2.72 (1.06)	2.84 (1.15)	医=看=銀=自
問題を起さないようにとの要請							
2.87 (1.08)	3.06 (1.02)	2.94 (1.08)	3.06 (0.99)	2.99 (1.12)	3.16 (1.14)	3.13 (0.91)	
親の職業が身近であること							自=医>教=看>公=会=銀
1.94 (0.89)	2.96 (1.12)	2.08 (0.98)	3.57 (1.26)	1.81 (0.81)	4.14 (1.19)	2.86 (1.13)	
親の職業に対する肯定的評価							医=教>公>会=自
3.63 (0.68)	4.27 (0.60)	3.98 (0.52)	4.50 (0.60)	3.82 (0.77)	3.34 (0.78)	4.30 (0.60)	医=教>公=銀>自 医=看=教>銀=会 医=看=教>自
親の職業に対する忌避感情							
1.66 (0.81)	1.90 (0.99)	1.66 (0.83)	1.93 (0.94)	1.75 (0.93)	1.79 (0.81)	1.60 (0.79)	
親に対する肯定的感情							
3.97 (0.85)	4.13 (0.82)	4.03 (0.82)	4.13 (0.83)	4.05 (0.88)	4.08 (0.73)	4.09 (0.83)	
親との同職就業意向							医=教=看>自
1.75 (0.94)	2.50 (1.37)	2.32 (1.16)	2.88 (1.52)	1.79 (1.05)	1.43 (0.93)	2.29 (1.45)	医=教>銀=会=自 医>公>会=自
アイデンティティ							
2.90 (0.84)	3.02 (0.94)	2.76 (0.83)	2.90 (0.91)	2.86 (0.93)	2.92 (0.76)	2.87 (0.65)	
セルフエスティーム							
3.11 (0.83)	3.25 (0.75)	3.02 (0.81)	3.13 (1.13)	3.03 (1.01)	2.95 (0.85)	3.07 (0.85)	
職業を考えるとへの積極性							
3.36 (1.16)	3.41 (1.16)	3.26 (1.12)	3.80 (1.08)	3.22 (1.23)	3.37 (1.14)	3.44 (0.91)	
職に就くことへの意識の高さ							
4.26 (0.87)	4.22 (0.87)	4.35 (0.80)	4.32 (0.87)	4.16 (0.94)	4.29 (0.83)	4.17 (0.82)	

N=789-798. 多重比較の結果は、7職種の最初の一文字を用いて表している

が認められた。とくに親が医者である場合に、子が家業や親の職業を継ぐことを社会は肯定していると見なしやすいことが示された。

親の職業から受ける影響の項目から得られた6得点では、5得点で有意差が見られた。親の職業を加味して評価される経験の得点に有意差があった($F(6,789)=130.01, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.50)。親が「医者」の場合に唯一得点が3点台で最も高く、次いで「教員」の場合に唯一得点が2点台であり、最も低い得点を示したのは「会社員」の場合であった。とくに親が医者や教員である場合、親の職業を考慮に入れた上で自分が評価されたり、自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験が多いことが示された。

親の職業を継ぐことの要請の得点にも有意差が見られ($F(6,790)=44.82, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.25)、親が「医者」の場合に唯一2点台の得点で最も高く、最も得点が低いのは「会社員」の場合であった。とくに親が医者である場合に、親や周囲から親の仕事を継承することの要請や継承することの期待を向けられることが多いことが示された。

親の職業をほめられる経験の得点にも有意差はあり($F(6,791)=45.77, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.26)、親が「医者」の場合に唯一得点が4点台で最も高く、次いで「教員」の場合に高く、「教員」との差はないが「看護師」が続き、最も得点が低いのは「会社員」の場合であった。親が医者や教員である場合に、親の職業をほめられたりうらやましがられたりする経験が多いことが示された。

優秀であるようにとの要請の得点にも有意差はあり($F(6,789)=4.09, p=.003$, 偏イータ 2 乗0.02)、親が「医者」の場合に唯一得点が3点台で最も高く、「教員」、「会社員」、「公務員」よりも高かった。とくに親が医者である場合は、まわりの人よりも高い水準の成果を出すことや優秀であることを子が課せられていることが示された。

親の職業が身近であることの得点にも有意差がみられた($F(6,791)=63.05, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.32)。親が「自営業」で唯一得点が4点台で最も高く、「医者」は唯一得点が3点台でそれに続いていた。親が自営業や医者である場合、親が仕事をしている姿を日頃から見ていたり、親の職場に行ったりすることがあり、親の職業が身近であることが示された。

親の職業に対する評価の項目から得られた2得点については以下の通りであった。親の職業に対する肯定的評価の得点には有意差があり($F(6,782)=33.44, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.20)、親が「医者」、

「教員」、「看護師」の場合に得点が4点台と高かった。親が医者や教員である場合、また看護師である場合も、親の職業を良い職業だと子が認識する程度が高いことが示された。

就業意識および人格形成の指標の項目から得られた5得点については1得点しか有意差が見られなかった。親との同職就業意向の得点にのみ有意差があり($F(6,788)=16.95, p<.001$, 偏イータ 2 乗0.11)、親が「医者」の場合に得点が高かった。親が医者である場合に、子が親と同じような職業に就こうと考えやすいことが示された。

以上の結果から、親の職業の違いによって、子どもたちの心理的な経験には差異が生じている可能性が高く、親が会社員などの場合に比べて、親が医者や教員である場合に特徴的な結果が見出された。特徴的な結果とは、親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験の多さであり、親の職業をほめられる経験の多さであり、親の職業を良い職業だと認識する程度の高さである。親が医者である場合の特徴としては、優秀であるようにとの要請、親の職業と同じような職に就こうと考えるようになることも加えられる。

なお、家業や職業を子が継ぐことの困難さを指摘する価値観の認知、問題を起こさないようにとの要請、親に対する肯定的感情、アイデンティティとセルフエスティームの得点、職業を考えることへの積極性と職に就くことへの意識の高さについては、今回、親の職種間による有意差はみられなかった。親の職業に対する忌避感情も、7職種間全体での有意差がみられたのみ($F(6,785)=2.13, p=.048$, 偏イータ 2 乗0.02)で、特定の2職種間での有意な差はみられなかった。

考 察

最後に、親の職業は青年期の子どもにとってどのような意味を持つのかについて考察を加える。

第一に、親子関係においては、自分の親の職業に対する評価が、親に対する感情に寄与していることが示された。子どもから見た親は、家庭人であるだけではなく職業人でもある。家庭生活の中での父親・母親というだけでなく、医者、教員、会社員など、社会の中で具体的な職業を持つ存在として認識されているということである。子の側から見ると、親の職業を良いものと見なせる程度が高いと、親に対する肯定的感情が増し、親子関係はより良好になると考えられる。

また親の職業を良いものと見なすようになることには、まわりから親の職業をほめられる経験が大きく関与していた。親の職業をほめられる経験が多いのは、今回の7職種間の比較からは、医者、教員、看護師を親に持つ場合である。これらのように、人を助けたり育てたりする職業に就いている親の子どもは、親の職業を良いものと見なし、自分の親に対する肯定的感情を持ちやすい環境にあると言える。

逆に、親の職業を疎ましく思う忌避的感情は、親に対する肯定的感情を低下させてしまう。親の職業に対する忌避的感情には、親の職業をほめられる経験の少なさから生じる場合もあるが、これは親がもっと社会的評価の高い職業であつたら良かったと、子が親の職業をもの足りなく感じている場合であろう。一方、“特別な職業の親を持つ子”としてまわりから見られ、評価される経験、親と同じ職業に就くことを期待されたり勧められたりする経験、そして人より優秀であることを要請されることなどが、親の職業に対する忌避的感情を高めてしまう場合がある。これは、あたかも自分の成果の何割かは親のおかげであるかのように見なされたり、まわりから勝手に職業的な将来を決めつけられたり、親からも同じ職に就くことを求められたり、人より優秀であれと求められたりし、それに反発やプレッシャーを感じている場合であろう。自分がこのような環境に置かれたのは親が“特別な職業”に就いているせいだと感じて、親の職業を疎ましく思い、親に対する肯定的感情までもが低下してしまうのだと推察される。自分は自分であるという思いが芽生え始める青年期においては、親の職業を通して自分が見られることや自分の将来を決めてかかるような周囲の対応が、かんに障るのだと思われる。

なかでも、優秀さの要請は親に対する肯定的感情を直接低下させる要因にもなっており、優秀であるようにとの要請を親から強く受けている場合に、親との良好な関係が阻害されやすくなる。大淵(2009)は、家族の強い学歴志向や、親が子どもに加える勉学圧力が子どもの親殺害を誘発することを未成年の子どもの家族殺傷事件の分析から指摘しており、本研究の分析結果もこれと同様の方向性を示していた。

第二に、就業意識においては、子が親と同じ職業に就こうとする意向を持つことに関連する要因がいくつか見いだされた。先に親子関係について述べたことにも重なるが、親の職業に対する肯定的評価および親に対する肯定的感情が高い場合、進路や就業を考える上でも親の影響を受けやすくなり、親と同じような職に就くことを子は考えるようになる。鹿

内(2006)は、親を生き方や職業上のモデルとしている傾向が高い大学生では、進路の未決定や回避の得点が低いことを示した。身近な親をモデルにして方向性を決められれば、未決定や回避が避けやすくなるという利点はある。それだけではなく、親の職業を加味して自分が評価されたり自分も親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験、そして親と同じ職業に就くことを期待されたり勧められたりする経験の多さが、親と同じような職業に就こうとする気持ちを直接高めることも示された。親の職業を勧められることは、自分が親から認められたように感じられて、子の背中を押すことが考えられる。親から子へ寄せられる継承期待が子の継承希望に影響することは先行研究でも報告されている(田中・小川, 1985)。親やまわりから同じ職業に就くことを期待されたり勧められたり当然視されたりする経験が、子の就業意識の形成に影響を与えることはありそうなことである。

ただし、これら2つの経験の多さには、親の職業に対する忌避感情を高めるという側面もあるため、逆に親と同じ職業に就こうとする意向を低めることにつながる場合も示唆されている。その職に就くことの困難さや独自の選択をしたいという青年期の独立心なども作用し、職業選択において葛藤が生じることが考えられる。

第三に、親の職種間による違いについては、アイデンティティ形成の程度とセルフエスティームの得点には有意差がなく、親の職業の違いが人格発達に影響を及ぼすことはなかった。また親に対する肯定的感情にも有意差は見られず、親の職業の違いが親子関係の良好さに影響を及ぼすこともなかった。

しかし、それ以外の側面では、親が会社員などの場合に比べて、親が医者や教員や看護師である場合にいくつか特徴的な結果が見出された。医者、看護師は人命に関わる社会的貢献度の高い職業である。教員も子どもの育成にかかわり社会的貢献度は高い。社会的貢献度の高さは、まわりからのほめことばとなり、子どもは親の職業を良いものと見なすようになる。良い評価は親に対する肯定的感情を高め、親子関係は良好になる。社会的貢献度の高い職業の親を持つことは、子に良好な親子関係を与える資源となることが示唆される。

また、親が医者あるいは教員の場合、親の職業を加味して自分が評価されたり、親と同じ仕事に就くかのように見られたりする経験が多い。さらに親が医者である場合は、優秀であるようにとの要請、親の職業を継ぐことの要請も高い。これら3つの得点では、親の職業に対する忌避感情を高める要因にもな

り、親に対する肯定的感情を低めることにつながる。このことから、社会的貢献度の高い職業であっても、親がその職業に就いているせいで、お医者さんの子、先生の子という枠組みで見られてしまい、自分個人の自由度が制限されるように感じられるとすれば、逆に社会的貢献度の高い職業であることが子どもにとって疎ましい環境として作用することになる。

このように、親が医者や教員であることは、子どもに社会的な圧力として働くこともある。これとは逆に親が会社員のような職種の場合は、親の職業から与えられる社会的圧力は少ないと考えられるが、親の職業をほめられるメリットも少ない。職業選択の自由度も高いであろうが、親の職業生活が見えづらい面もあり、子が職業選択を夢見たり考えたりする際の具体的なモデルとはなりにくいきらいがある。親の職業が何であることが子どもにとって良い環境となるのかは、功罪どちらの面も想定され一概には言えない。したがって、親の職業という与えられた環境でどう生きるかが、青年にとっての共通の課題になると言うべきであろう。

以上述べてきた通り、親の職業は、青年期の子どもにとって親子関係に影響を及ぼす要因の一つとなることが示された。また、親の職種の違いによって、子どもたちの心理的な経験には差異が生じており、社会的貢献度の高い職種の場合に顕著な特徴が見られた。

引用文献

船曳健夫 (1998). 二世論 新潮文庫
北原佳代・佐々木美樹・岡部恵子 (2005). 職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との

関係——新入生を対象にして—— 紀要 (つくば国際短期大学), 33, 121-139.

真野俊樹・小林 慎・井田浩正・山内一信・藤沢弘美子・塚原康博 (2004). 医師の進路選択に関する考察——開業志向に注目して—— 医療と社会, 14, 85-102.

三好昭子・大野 久・内島香絵・若原まどか・大野千里 (2003). Ochse & Plug の Erikson and Social-Desirability Scale の日本語短縮版 (S-ESDS) 作成の試み 立教大学心理学研究, 45, 65-76.

森 剛志・松浦 司 (2007). 開業医の地位継承に関する実証分析 医療経済研究, 19, 169-183.

内閣府政策統括官 (2009). 第8回世界青年意識調査報告書<<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/1.html#no1-9>> (2014年9月24日)

NHK 放送文化研究所 (2003). NHK 中学生・高校生の生活と意識調査2012——失われた20年が生んだ“幸せ”な十代—— NHK 出版

大淵憲一 (2009). 親を殺す「ふつうの子ども」たち PHP 研究所

鹿内啓子 (2006). 大学生の職業未決定に関わる要因の検討——未決定型による比較—— 北星学園大学文学部北星論集, 43, 133-148.

田中宏二・小川一夫 (1985). 職業選択に及ぼす親の職業的影響——小・中学校教師・大学教師・建築設計士について—— 教育心理学研究, 33, 171-176.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

(受稿10月31日：受理11月6日)